

資料室だより 152

(ヴリーゲン氏寄贈より)

La notation musicale des chants liturgiques latins Solesmes 1991

ソレムの研究活動のすぐれた業績であるパレオグラフィカルな記譜の研究書である。43の古写本のファクシミリと写本の解題がセットになっている。写本を所蔵する文書館・図書館と文献番号、記譜のタイプ、年代、写本全体の概要。

ヴィシゴート典礼に属するモサラベ聖歌に関してもトレド大聖堂が所収するタイプとシロスを出自とする聖務日課書、モサラベアキタニアネウマの移行時代を示す写本が年代順に並べられ、大変興味深い。これは資料室ではなくハッチハウスに配架されている。

宮越俊光：シンボルで味わう典礼・礼拝 日本キリスト教団出版局 2023

キリスト教の典礼は宗派を問わずシンボルに満ちている。座る、ひざまずく、行列などの動作、また秘跡に関すること、パンを裂く、灌水、按手、歌うということもこのなかで論じられる。祭服や祭具についてもその名称を図版と共に示しアルバ、カズラ、パリウム、ダルマティカ、カップ、ミトラ、バクルス、パテナなど一カトリック以外の宗派の者にはわかりにくい名称も確認することができる。

各項目に文献表も付されているので典拠にさかのぼって調べることもできる。

~~~~~  
宗教法人「聖グレゴリオの家」宗教音楽研究所 第一回シンポジウム報告書

**“これからの典礼と音楽”**

このように題された小冊子が資料室にある。1979年にグレゴリオの家で発行しているので創設まもないころであろう。ゲレオン師による「典礼とは」、音楽学者の野村良雄氏による「音楽学者の立場からみた典礼と音楽」、所長の橋本周子先生による「ヨーロッパの宗教音楽の体験から」という3本の提題があり参加者によるディカッションの記録がある。上記の3人の方々は皆すでに天に召された。橋本所長はつい最近に。しかし、司祭、学者、教会音楽実践者の3者によるこの真摯な提題と議論はグレゴリオの家の創設の理想と目的、進むべき道を指し示す羅針盤として今もなお一読に値する。

杉本ゆり 記  
聖木曜日に